

現代のアメリカを象徴する出来事



大学総合文化政策学部教授
大学宗教主任
森島 豊
MORISHIMA Yutaka

プリンストン神学校の学長交代

2023年8月から1年間、在外研究期間をいただき米国のニュージャージー州にあるプリンストンに滞在していました。プリンストン神学校は、1812年に創立された長老派の神学校です。おそらく日本人で最初に学んだのは、日本の花嫁』を書いた田村直臣だと思われま。その後、富田満や賀川豊彦など、数多くの神学者が学びました。

2023年はプリンストン神学校の歴史の転換を象徴する出来事がいくつかありました。最も大きなものは、第8代学長としてジョン・ササン・ウォルトンが新しく就任したこと。プリンストン神学校の学長任期はとても長く、それだけに学長就任は神学校の方針を象徴する重要なメッセージを持っています。

ウォルトンはプリンストン神学校が始まって

最初の黒人（アフリカ系アメリカ人）の学長となり、また、はじめて長老派に属さない学長となりました。この理事会の歴史的決断は、神学校だけでなく、現在のアメリカの一つの立場を象徴しています。近年、黒人に対する暴力や人種差別の構造の撤廃を訴えるブラック・ライブズ・マターの運動が大きくなっています。これに対して、アメリカの各大学は自らの負の歴史を自主的に公にしています。たとえば、隣接するプリンストン大学ではプロジェクト「プリンストンと黒人奴隷」を企画し、黒人奴隷を所有した大学人を調査しました。その中には、第3代の学長で大覚醒運動を指導したジョン・ササン・エドワーズが含まれていました。

初めに教えていた神学者サムエル・ミラーにちなんで「ミラー・チャペル」と名付けられていました。ところが、2022年に「セミナリー・チャペル」と名称を変更しました。その理由は、ミラーが黒人奴隷を所有していた事実が明らかになったからです。理事会は悔い改めを象徴する歴史的行為として名称の変更を決断しました。もう一つ大きな出来事は、2023年にケリー・デイがプリンストン神学校ではじめての黒人女性として教授に昇進したこと。これらの出来事は、プリンストン神学校が新しい時代に向かって新たな決断をしていることを象徴しています。それはアメリカの負の歴史を直視し、悔い改め、多様性に寛容な姿勢を表しています。

長い時間がかかりますが、自らの負の歴史を自主的に公にして、悔い改めと償いの姿勢を示

す運動がアメリカ各地で見られます。この運動に関わっている一人の神学者が次のように述べていました。「我々は5年プロジェクトでこれまでの負の歴史を明らかにしてきました。問題は、この後どうするかです」。アメリカの特徴なのかもしれないが、この事実を明らかにした後のことは考えていません。それは後の世代が自分たちで考えて、担っていくのかもしれない。

多様性が生み出す分断

1995年に米国を訪れたときに比べて、さらに多様化が進んでいる印象を受けました。それが神学校の礼拝の形式にも表れています。神学校には礼拝をコーディネートする3人のチャプレンがおり、彼らが毎日の説教者や讃美歌、そして礼拝のスタイルを決めています。礼拝は毎日異なった形式で行われ、伝統を重んじながら、多様なあり方を挑戦的に導入しています。

一つはスペイン語の讃美歌がたくさん導入されています。メキシコや南米からの移民が多く、ほとんどの学生がスペイン語の讃美歌を歌えます。チャプレンたちは留学生を把握して、欧米だけでなく、アラビアからアジア、アフリカまで様々な国の音楽や讃美歌を積極的に導入し、礼拝に奉仕させています。

また、日本のプロテスタント教会ではほとんど導入されていないカトリック的なものも取り入れています。たとえば、灰の水曜日には額に黒い灰を塗る儀式がありました。また学期が始まり学生がストレスを感じる時期に、とても

良い香りのする油を額に塗る塗油がありました。聖徒の日にはデイズ・ニー映画『リメンバー・ミー』のような明るい音楽で逝去者を覚えめました。

一方で、多様性の導入が分断を生んでいる深刻な事実もあります。プリンストン神学校は、ハーバード大学やイエール大学ほどリベラルではありませんが、保守的でもありません。立場としては、リベラルと保守の中間に位置しています。それでも、保守的立場からすればリベラルだと批判されます。しかし、近年は卒業生からも批判されている問題があります。その一つがLGBTQ+です。

神学校は多様性を尊重し、この問題にも積極的に取り組んでいます。学生だけでなくファカルティーのメンバーにもLGBTQ+がおり、説教から聖餐の奉仕者までLGBTQ+だけで行う礼拝もありました。しかし、伝統を重んじる多くの卒業生は、この決断を批判しています。これだけが原因ではないと思いますが、10年前は学生が溢れかえっていました。現在、学生数は半分以上に減っています。プリンストン神学校から2時間ほど離れた、より保守的なウェストミンスター神学校を選ぶ学生や献身者も少なくありません。

2023年に亡くなりましたが、説教者として有名なティモシー・ケラーというアメリカの長老教会の牧師がいました。2017年、プリンストン神学校は彼にアブラハム・カイパー賞を授与する予定でした。ところが、ケラーが女性やLGBTQ+を聖職者に任命することに反

対するアメリカ長老教会（PCA）の立場を支持していたため、多様性を尊重する卒業生からの抗議の声が大きく、最終的に授与を取りやめました。アメリカ社会を分断するLGBTQ+や中絶などは、神学校や教会にも難しい問題を突きつけています。

イケダ・アーチ

最後に日本人の名前を冠したイケダ・アーチを紹介します。2023年9月にプリンストン大学の玄関アーチの一つが、池田謙太郎の功績を称えてイケダ・アーチと命名されました。第二次世界大戦中、多くの日系人は強制収容されました。ところが、プリンストン大学はプリンストンの外に出ないことを条件に、当時同大唯一の日本人学生だった池田の在学を認め、彼を強制収容所に送らずに済みました。しかし、プリンストンから外出できず、家族を含め日本との連絡を禁じられるなど、戦時下の制限は続きしました。その極めて困難な状況下における池田の感動的な忍耐強さを評価し、またアメリカが過去にしたことへの悔い改めを象徴するものとして、イケダ・アーチと命名されました。

日本でも第二次世界大戦中に近隣諸国からの留学生がいたと思います。きつと多くの苦労があったかと思いますが、このように記憶に刻んだ学校が他にあるだろうか、プリンストン大学の姿勢に心動かされました。願わくば、青山学院大学が日本で最初にその行動を起こす誇り高い学校になればと思いました。